

『昔話の構造 図式語彙で文脈を読み解く』

野林正路著
和泉書院刊

野林正路氏は、一九八二年、方言語彙調査での経験から「図式語彙」を見出す。それは、人々が無意識に行う知の考量図式で、基本的な言語媒体として、生活世界の様々な分野や言語作品にも仕組まれているという。その実証モデルとして、鈴木棠三編『新潟県佐渡昔話集』から「鶴女房」を取り上げた。「昔々山奥に心がけのよい若い狩人が住んでいた。あるとき、美しい女が尋ねて来て嫁になりたいたいというので、狩人は承知した」という話文から、狩人という名辞を開いていくと、「狩人0（一般）」「心がけよき、独り身の」狩人1「尋ねてきた、女と夫婦になった」狩人2「尋ねてきた、彼の行動と共に変貌する。鶴女房が去った後、狩人は百姓になるが、百姓は「村里」に関わり、その対（ペア）は「城市」である（氏は、結末句、市が繁昌來えたの文言に重要な意義をみる）。また、「村里」には「機織り」などものつくりをする「百姓女」が存在する、と読み解く。一方、鶴女房の織った布を買う「お姫様」（鶴女房は八百両でお城の姫に売れと狩人にいう）は

「百姓女」と遠く、両者の間には鋭い反立関係があるという。野林氏はここに、この話の「作り手たちや語り手たち」の隠された志向性をみてとる。

隠された志向性は、ことばの方向性や質と異に見出される。この話には「古くくて滅びゆく」者たちと、「新しくもめる」の者たちと、強く鋭く対立し合っているのを、「古くもあれ」ば、「新しくもある」ような存在が仲立ちしているという。山奥に関わり生きる者たち、異界、狩人など古い存在に對し、城市に関わり、物と金を交換し、金、権力をふり仰いで生きる新しい者たち、その両様の特性を引き付けているのは、われわれ百姓なのであるという、彼ら自身の、大地の声（意境の思想）を図式語彙から探る文脈に聞き取る。この書の究極のねらいは、志向対象の、発声なき、隠された「事実存在」ないしは、その「連関（連合関係）」が、発声された〈言述〉の「基盤・土台」となるという事実の強調に尽きている、と野林氏はいう。

とる。何十、何百と類話を集め、項目を行に立て、列にひとつひとつの話から拾った名詞、動詞などを並べる「行列表」を作る。似ているが、大きく違うのは、話型分析は多数の話を扱い、いわば最大公約数を求めることに對し、「図式語彙」による分析はひとつの話を徹底的に開き、拡大させ、交差させて読み解くことにある。

野林氏が取り上げた話は、鶴女房譚の中核をなす、禁令と違反、それに伴う正体露見というモチーフを持たず、一般普及型ではない。しかし、語り手たちが無意識に示す言語の仕組みをとらえて背景を探ると、この話も普及型と同じく「百姓」の話だと見出す点は興味深い。野林氏は、異界の存在の鶴が機を織る女へと人格上の変貌をし、その女が機を売るように告げて人間界を去る鶴へと変貌することを、語り手たちはあらかじめ予知している語つて、語り手たちはあらかじめ予知している語つて、「伝承」と述べているが、これを深読みすれば、「伝承」の機能の一面を示しているのではないかと思う。

野林正路氏は二〇一九年に逝去された。波乱万丈の人生を送りながら、長年の言語調査を基に、茫漠とした言語の海から、人々の声なき主張を読み解かれてきた。そこに深く尊崇の思いを抱く。
(中村とも子)
(二〇二〇年八月／本体八〇〇円)

『南方熊楠と日本文学』

伊藤慎吾著
勉誠出版刊

南方熊楠の論考は研究史上に位置づけられることが困難なまま今日まで置き去りにされている感がある。本書はそのような南方の研究のあり方を日本文学研究の視座から捉える事を試みた力作である。以下にその内容を概観してみる。

本書は三部構成であり、第一部は「古代・中世文学の受容」と題して『古事記』から『奇異雑談集』まで八世紀～十六世紀までに成立した文献を南方がどのように引用していたかを考察している。南方の代表作である「十二支考」にどのような文献をどのように引用されているかを確認した上で、1. 南方が作品の文学史上の成立事情や作家への興味をもっていないこと。2. 引用の際に歴史考証を行わず、史実性に乏しい作品と歴史書とを同様に扱って対比させていること。という二点を指摘している。これは正鶴を射た主張と言えるだろう。近年、とにかく事例を網羅したウィキペディア的なデータベースの構築そのものを南方が目指していたのではないかという議論がある。そのような視座に立つとき、南方の引用を個別に精査した著者の指摘

は重要な意味をもつ。他にも『室町時代物語集』を編纂した横山重との交流、熊楠が人から借覧して全文を筆写した『熊野の本地』の位置付け、南方の御伽草子『蛤の草紙』論を柳田國男や大島建彦らの民俗学的な考察と比較して扱っている。

第二部は「近世文学の受容」と題して、南方の妖怪研究を具体的に取り上げている。そこで使用された文献を諸本関係まで明らかにして、架蔵本や日記等への「書き込み」も参照しながら南方が類話をどのようにに搜索し、扱っているのかを考察している。特に柳田から借覧した『甲子夜話』をどのように論文に利用していったのか考察し、その後の柳田との文通に端を発して開始された妖怪研究についても、カシヤンポ・ニクスイ・コサメコジヨロウ・イッポンダタラ・牛鬼・山姥・ヒダルガミ・ネコマタなど南紀地方で呼ばれる妖怪たちを、南方がどのようにに捉えていたのか、著者自身のフィールドワークによる知見も交えながら分析している。

第三部は資料編となっており、南方熊楠顕彰館に現存する横山重から南方に宛てた全書簡の翻刻等、同館所蔵の一次資料の翻刻と紹介が〇〇頁あまりにわたり収録されている。かつて研究会の席上、第二部四章で紹介されている「随聞録」が南方の「聞き書きノ一

ト」ではないか、という考察を筆者が発表したところ、著者の伊藤氏は強い異論を唱えられた。「書物の筆写が並ぶ『田辺拔書』にそのような性質の違う記載を行うはずがない」というのがその理由であった。資料がどのような性質のものであるのかに慎重な日本文学研究の立場からの見解であり、南方の恣意的な読書や資料の扱い方が日本文学・民俗学・口承文芸学といった今日の人文諸科学に理解されにくい現状を象徴的に示す出来事である。本書は著者がこのような内なる違和感と戦いながら南方の遺した膨大な資料と格闘し、咀嚼した成果とも言える。中には南方の書き込みや読書傾向を重視するあまり、南方が常に明確な研究の指針を持って資料搜索や執筆にあたったかのような結論が多くみられる。そのような点に関する議論もふくめ、南方研究が活発になる起爆剤となることを期待したい。

なお本書には柳田が「遺族院書記官長」になる等、多数の誤字脱字が残された恨みがある。これは出版社の領分といえるが、南方に多大な影響を与えたハーバード・スペンサーがバーナード・スペンサーと誤記されている(二十二頁)点だけはここに訂正しておきたい。
(広川英一郎)

(二〇二〇年二月／本体七〇〇円)

『沖繩の民話21話 (THE BEST 21 OKINAWAN FOLK TALES)』

遠藤庄治(文) 新城浪夫(訳) 安室三雄(絵) 琉球新報社刊

二〇〇〇年に九州・沖縄サミットが開催されることを記念して「21世紀に残したい沖縄の民話21話」という企画が立ち上がった。沖縄民話の会が各地から聴取した七万話の中から五十話が新聞に掲載され、沖縄県民から寄せられた約三千通の葉書投票によって二十話が選ばれて絵本『21世紀に残したい沖縄の民話21話』(琉球新報社、二〇〇〇年)が刊行された。本書は、この絵本の民話本文二十一話と絵に新たに英訳を追加掲載した和英対訳本で、沖縄の豊かな民話を国外のより多くの人々に知ってもらうこと、子どもたちが郷土の文化を語り継いでもらうこと、英語学習の教材として活用してもらうことなどを願って出版されたという(まえがき)。絵本用に整えられた本文が右頁に、やさしい英文訳が左頁に記載されている。分類別では「ハエとスズメ(The Fly and the Sparrow)」などの動物昔話が五話、本格昔話が十話、伝説が六話となっている。

(原田信之) (二〇二〇年四月/本体二五〇〇円)

『トカラ列島の民話風土記』

下野敏見著 榕樹書林刊

本書は、一九六五年〜一九八三年の十島村の「民話風土記」であり、島別に話を記す構成は各島の特性を浮き彫りにしている。著者が「歴史や信仰、その他、民話の枠を少し広げてトカラらしい優れた話や貴重な文化を紹介するものです」と述べているように、著者が見聞した祭り・芸能・世間話なども本書に盛り込んである。ときには、著者自身が話者になることもある。著者が物語の中に顔を出し、地元の人から聴いた話を語ることもある。

また、十島村は、琉球との関わりも深く、北をニシ、城をグスクと言う琉球語が残っており、一六〇九年の薩摩の琉球侵攻では七島の島民二百数十名が水先案内をつとめたという。琉球の人が中之島・諏訪の瀬島・悪石島で硫黄を採取したことなどは、琉球と中国の交易へつながる話である。尚、永松美穂子氏の挿画は、本書の平易な文体にマッチしており、子どもから大人まで楽しく読める。

(狩俣恵二) (二〇二〇年三月/本体二五〇〇円)

『時空を翔ける中将姫―説話の近世的変容』

日沖敦子著 平凡社刊

中将姫説話を精力的に研究している著者が、今までに発表した論考を基に、最新の研究動向も加えて書き下ろした書である。

中将姫説話は、鎌倉時代では当麻曼荼羅の由来を説くものであった。室町時代になると継子譚と結びつき、中将姫の一代記になった。浄瑠璃や歌舞伎の題材になる一方で、江戸時代では絵解きが盛んに行われていた。これは、浄土宗の僧である袋中と彼に帰依する信仰集団が広められたためである。中でも、中将姫が開山したとされ、貴顕の信仰を集めた青蓮寺の縁起絵巻は、他の寺院の絵伝よりも制作が早く、江戸時代初めの中将姫説話の一端を伝えるものだと説く。

また、中将姫が遺棄された「ひばり山」での在地信仰にも言及する。ひばり山伝承地では、ゆかりの家や寺院が中将姫に関する事物や伝承を大切に守っていることを紹介する。本書は、中将姫説話を知る上で重要な事項を欄外で説明したり、豊富な図画資料を用いたり工夫が凝らされ、読みやすい。中将姫説話を知る上で欠かせない書になるだろう。

(関根綾子) (二〇二〇年三月/本体一〇〇〇円)

『お伽草子超入門』

伊藤慎吾編 勉誠出版刊

十四世紀後半から、約二五〇年にわたって創られてきた物語草子を「お伽草子」(室町物語)と呼ぶ。長い間日本文学研究の中では脇役に追いやられてきたためか、今でも誤解されることのあるのを受けて、多くの人に「正しく」理解して欲しいとの願いのもと本書は編まれた。

カラー刷りの口絵から始まって、妖怪、異類婚姻、恋愛、歌人伝説、高僧伝といったお伽草子の代表的なテーマから一話ずつを取り上げていく。現代語訳も交えたわかりやすい解説や、「鼠の草子」に着想を得た創作漫画は、初めての読者にも親しみやすいものだろう。不思議の物語世界を読み解いた論考もある。

付録篇には、お伽草子の基礎知識やガイド、年表風作品ガイド、主要モチーフの索引、妖怪小辞典等があり、様々な角度からお伽草子の作品を理解できる工夫が凝らされておりお伽草子研究に尽力してきた徳田和夫氏の定年退職を機に集った関係者は、本書を通してお伽草子の豊かな世界へと導いてくれる。

(菱川晶子) (二〇二〇年七月/本体二八〇〇円)

『蛇神をめぐる伝承 ―古代人の心を読む』

佐佐木隆著 青土社刊

本書は、奈良時代の『古事記』『日本書紀』『風土記』などの文献に出てくる蛇神をめぐる記事から、平安時代の『今昔物語集』『日本書紀』などの説話集におさめられている蛇にまつわる物語を素材に、古代日本人の蛇に対する認識の変遷を追究しようとするものである。奈良時代の、特に三輪山説話において神であった蛇が、平安時代の説話集において、なぜその霊威を徐々に失い、人々に不気味さと嫌悪感のみを抱かせる存在に零落していったのか。著者は数多くの説話群からその要因に仏教の影響を見る。紹介者はこの三輪山説話から広く民間に伝承されている「蛇智入・芋環型」への変遷を、地理学の景観論の立場から論じたことがあるが、神から単なる蛇への零落は、やはり仏教の影響が大きいのと考えている。本書は、奈良時代には蛇が雷や刀剣ともイメージされた点や、古代日本語の視点から物語に登場する人物名を解釈する方法論が紹介されている。

(佐々木高弘) (二〇二〇年十月/本体一八〇〇円)

『日本幽霊画紀行 死者凶像の物語と民俗』

堤邦彦著 三弥井書店刊

寺院所蔵の幽霊画をめぐる物語や民俗の実態を明らかにし、その根幹に横たわる法義や唱導の呪具としての意味を、歴史的な経緯に照らして解き明かす。豊富な死者凶像は、全国各地の寺院を訪ね、調査を重ねてきた著者の足跡を物語っている。美術史の対象としての研究とは異なり、在地の幽霊画を取り巻く人々の数奇な運命や悲哀、信仰心などを、多面的な視座から浮き彫りにしている。「従来の絵画研究にとどまるかぎり、古寺名刹の寺宝となって今日に伝わる幽霊画の全貌は把握しきれないように思う」という著者の言葉に、本書の意図が端的に示されている。

全体は、第一章「寺と幽霊画」、第二章「血族の証明」、第三章「寺蔵幽霊画を巡る旅」、第四章「幽霊画と江戸怪談」から成る。いずれの論考も興味深い。とくに「みちのく幽霊画紀行」呪具としての死者凶像(第三章)は、幽霊画を雨乞いの呪具として掛けたら、家の魔除けに用いる習俗について論じたもので、本書のなかでも異彩を放つ内容である。

(常光徹) (二〇二〇年九月/本体二八〇〇円)

『浪花節の生成と展開』

—語り芸の動態史にむけて—

真鍋昌賢編著
せりか書房刊

近代日本で一世を風靡した語り芸・浪花節の実態に迫る注目の書。口承文芸学・芸能史研究・音楽学など様々な分野の研究者による。うごめく歴史への想像力―浪花節史をつかまえるために(真鍋昌賢)／円朝物の浪曲化―安中草三郎(延広真治)／二代目末広亭辰丸と新派浪花節―語られる「金色夜叉」(馬場美佳)／近世の講談と浪花節―曽我物語を中心に(渡瀬淳子)／明治大正期の「女流」浪花節語り(北川純子)／浪花節の「民俗化」と人形芝居―西畑人形の節劇をめぐって(齋田郁)／弁士の源流―浪花節との関係について(上田学)／ハワイと南カリフォルニアの日系社会における浪花節(早稲田みな子)／帝國日本の愛国浪曲―朝鮮語浪花節の実体をめぐって(朴英山)／藤井清水と浪花節(廣井榮子)／SPレコードおよび新聞ラジオ面における浪花節の詞章―前田節子『壺坂靈驗記』を例にして(細田明宏)／呼称の変遷と興亡のメカニズム―証言と記録をたどりつつ(芦川淳平)／浪花節の口頭性―左甚五郎ものを中心に(時田アリスン)／浪花節「ら」さの境界性―京山幸枝若『野球狂の詩』における音の空間の生成(諏訪淳一郎) (細田明宏)

(二〇二〇年九月／本体四四〇〇円)

『近代芸能文化史における壺坂靈驗記』

—生人形から浄瑠璃、そして歌舞伎・講談・浪花節へ—

細田明宏著
ひつじ書房刊

浄瑠璃や浪花節の演目としてよく知られる「壺坂靈驗記」。明治期から昭和前半において、よく知られたお里沢市の物語が、錦絵、生人形、歌舞伎、浄瑠璃、講談、浪花節といったジャンルの間を、視覚聴覚の両面にまがり蛇行し流通するプロセスを、本書は克明にえがく。その過程は、前近代を資源とした近代における「靈驗」の再生である。著者は、一つの演目に焦点を合わせて、丁寧に事例比較をおこないながら手堅く実証研究を進める。男性的・国家的な視点に立った近代家族における妻の理想像が再生産されている様子を活写するうえで、「壺坂靈驗記」は、格好の物語であるだろう。貞節と夫婦愛が、登場人物の内面描写をとまなうことで、共感をよび、勢いよく拡散し、その力動を得ることで、「靈驗」が宗教から芸能へ、芸能から宗教へと往還することを、本書は見事にとらえている。読者は、読み進めるなかで、近代における浄瑠璃の位相が、文化的に興味深いテーマだということを得心するに違いない。

(二〇二〇年二月／本体七八〇〇円)

『人類学者の落語論』

川田順造著
青土社刊

敗戦の年、小学五年生の順造少年は、〈今村信雄おじ〉に連れられて初めて落語を聴いた。以来七十五年。本書の〈序〉は、落語の入門・教養が整理されている。(第1部)では、フランス留学・長期のアフリカ調査後、〈語りの演戯性という観点から、歴史伝承や民話の語り共通の視野に、落語も入れて考えようになった〉と語る。江戸・近現代の落語・芸能・文学史が凝縮されており、特に三遊亭圓朝へのこだわりをみせる。(第2部アフリカの落語)では、西アフリカのモシ社会の「滑稽譚を含むお話の場」(ソアスガ)を紹介。(「口切りは「なぞなぞ」で、昔話と同じ(ソレムデ)と呼ぶ。〈ひる昔〉は禁止。日本とモシの語りの場と昔話「俵葉師」の比較。(第3部アフリカの夜の話)では十六話を紹介。結末句(お話おしまい、市もおしまい、今夜のソアスガもおしまい)。いずれも興味深い。(付論)は締めめの笑い。この落語論は唯一無二。(今後の世界では二度とありえない「落語人生」を経験した著者)の自叙伝でもある。

(二〇二〇年二月／本体一八〇〇円)

『うた』起源考』

藤井貞和著
青土社刊

古代から現代の、地域も異なる「うた」についての膨大な考察である本書を紹介しようとして、途方に暮れる。たとえば、三頁と一行しかない最も短い章である「第二十九章痛い」だけでも、「おくのほそ道」、謡曲「実盛」、源氏物語、琉歌、「苦海浄土」、「万葉集」、「榮華物語」、「千五百番歌合」から「うた」を中心に自在に引かれ、考察が展開する。「あとがき」で本書は「詩歌集の趣」にもしたとある。一方で「平安和歌にしる、当時のまざれもない現代詩だった」(同前)と藤井氏は述べており、本書では、広範な詩歌をまさに現代詩として捉えているのだ。「(起源)を語りながら現代で受けとめたい(うた)のあれこれを、自由に、自分の納得できる範囲で、新見を含めて一書にまとめた」(同前)とは、希代のポエタ・ドゥクトゥス(学匠詩人)だからこそ成し得る仕事であるだろう。拙文の補足として、二〇二〇年度第七四回毎日出版文化賞(文学・芸術部門)を本書が受賞したことを記しておく。

(二〇二〇年六月／本体四二〇〇円)

『子どもの替え唄と戦争―笠木透のラス・ト・メッセージ』(叢書文化の伝承と創造)

鶴野祐介著
文民教育協会子どもの文化研究所刊

日本初の野外フォークフェスティバルを開催したミュージシャン笠木透(一九三七―二〇一四)は、戦争中の子どもの替え唄を集めていた。子ども文化研究に実績をもつ著者が、この貴重な資料を遺族から託されてまとめたのが本書である。替え唄を紹介したテキスト、戦時の子どもの文化を考察した研究論文から成り、笠木の論考も再録される。まず驚かされるのは、統制下に創られ、歌われた替え唄の豊穡さだ。対義語への置換や下ネタの挿入で、官が打ち出すテーマが相対化されることが分かり、文化の創造における子どもが存在が改めて注目される。笠木の問題意識と実践が、生活綴方、反戦運動など、戦後史の折々の契機に導かれていることも論述される。そして、替え唄という実践が、子どもの世界に支結するものではなく、周囲の大人の黙認と支援に与っていたとする著者の展望は、子ども文化のみならず伝承という現象を根底から考え直す重要な提言だろう。本書が多くの読者に出会うことを期待したい。

(二〇二〇年八月／本体二〇〇〇円)

『日本語と華語の対訳で読む台湾原住民の神話と伝説』上巻 アミ族、ブヌマ族、タオ族、パイワン族、ルカイ族

『日本語と華語の対訳で読む台湾原住民の神話と伝説』下巻 ブヌ族、サオ族、ツオウ族、サイシャット族、タイヤル族、孫大川、Pudang原書企画、林初梅編、監訳、古川鏡薫、三元社刊

台湾原住民の神話と伝説を紹介する、平易な選集が出た。台湾で刊行された『臺灣原住民の神話與傳説』(二セット一〇冊、新自然主義・幸福緑光出版社、二〇〇六年)にもとづく、日本語と台湾華語(中国語)の対訳であり、一〇民族からそれぞれ三から五話が採録されている。この二冊により、オーストロネシア系(南島語族系)の住民たちが、祖先からどんな物語を受け継いできたのか、概観を得ることができよう。現代の読み手に向けて親しみやすく再話されているので、首狩りのような風習さえも、遠い世界の出来事ではなく身近なことに感じられてしまふはずだ。

また本書には台湾華語の単語リストと注音符号一覧も付されており、これは学習者向けの行き届いた配慮である。これらを活用することで、中国語の多様性にも目を向けたい。監修者が言うとおり、世界で広く用いられる中国語は地域や使用者により、バリエーションに富む。簡体字とピンインによる中国語だけが全てではないのである。

(二〇一九年十一月／本体各三二〇〇円)

